西南学院大学　人間科学論集　第14巻　第1号　　279―318頁　2018年8月

＜研究ノート＞

なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができないか

―「感性教育」の新たな試み―

小　林　隆　児

Why Cannot Many Students Feel Ambivalent Emotions Between Mother and Infant? : New Trial of “Brushing-up Sensibility Education”

Ryuji Kobayashi

この数年、筆者が取り組んできた「感性教育」が実際どのような効果を生むか、教育現場で検証してきた。ただ、これまで主に大学院生を対象としてきたため、対象は少数にとどまらざるをえなかった。それは対話を重視した臨床教育ゆえでもあったが、今回、大人数を対象に同様の効果がどの程度期待できるか、より多くの対象に試みた。対象は学部1年（主に18歳から19歳）の学生計60名である。対話を除き、これまでの「感性教育」に準じた方法で実施した。1歳0ヶ月の子どもと母親の交流場面（新奇場面法）を供覧しながら、最初に子どもに、ついで母子関係に焦点を当てて観察するように教示した。ついで、ある学生の感想を例示して、自分たちのそれとの比較から、気づいたことを自由に記述するよう指示した。

その結果、41.7%（25/60）もの多くの学生が母子間に立ち上がるアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができず、この母子関係を肯定的に評価した。さらに、男女間で比較すると、女性の方にその傾向がより強かった（χ^2＝0.566、p＜0.5）。ついで、見本で提示したある学生の感想文を読んで、彼ら

は、自分の観察がいかに先入観にとらわれ偏っているか、さらにはいかに多様な見方があるか、に気づくとともに、母子観察が自分自身の幼少期体験を賦活化させ、そのことが子どものこころの動きを比較的容易に理解することにつながっていることを体感した学生も少人数ながら確認された。

以上の結果から、今回の大人数での試みは、これまでの少人数での対話重視の「感性教育」ほどには自己洞察を得ることは困難であっても、人間観察という営みがいかに観察者の関心・欲望に相関したものであるかを実感するとともに、多様な視点からの観察の重要性への気づきを得た学生は多かった。

最後に、多様な視点からの観察の重要性への気づきは重要ではあるが、なぜ母子間のアンビヴァレントな情動を感じ取ることが困難であったか、その自己洞察につながるための「感性教育」を目指すためには対話重視の少人数教育がぜひとも必要であることが再認識された。

はじめに

今日、乳児から高齢者まで、多様な生活困難を抱える人々を対象とする対人援助を生業とする職業の人材育成は喫緊の課題となっている。

これまで筆者は、長年にわたり、医療・教育・福祉・心理など、様々な領域の人材育成教育に従事してきたが、その難しさをも痛感してきた。人が人を理解するという営みは非常に奥深いもので、そのことを人材育成教育でどのようにして実践するかという問題がいつも筆者に突きつけられてきた。そうしたなかで、筆者が最近辿り着いた試みが「感性教育」であった。その詳細についてはこれまでにも機会あるごとに述べてきた（小林、2017a；小林、2017b；小林、2017c；小林、2018a；小林、2018b；小林、2018c）。

実際の教育現場の方法を省みて気づかされるが、精神障碍を持つ人々をはじめとする生活困難事例を理解するために理性に働きかける方法が多用されることはあっても、感性に直接働きかけるすべをなかなか持ち得ないのが実情である。

対人援助者にまずもって求められるのが共感力であることは言わずもがなであるが、では共感力をいかにして養成するかとなると実際には非常に困難なものである。

いかにしてより良い対人援助の実践を目指すか、そのあり方を探求してきた一研究者として、筆者が今痛感するのは、援助者自身が自ら主体として対人援助の関わり体験を自ら内省することの重要性である。筆者らはそのこと自体がこの領域の研究において重要なエヴィデンスであることを主張してきた（小林・西、2015）。

筆者の考えでは、治療的面接でもっとも求められるのは、患者の根源的な苦しみを読み取り、それに対する治療的働きかけであるが、そこで鍵を握るのは患者を苦しめている多様な症状の背後に蠢いているアンビヴァレンスという独特な情動の動きを臨床家が掴みとり、それを治療的に生かすことである（小林、2015；小林、2016）。ただ、そのためにはアンビヴァレンスという独特な情動の動きを感じ取ることが臨床家には求められる。しかし、それは容易に言葉では表すことができないゆえ、臨床家自身の感性に委ねられるところが大きい。そこで臨床家の感性を磨くためにはどのような教育が必要かを筆者は考えてきた。そこで生み出されたのが「感性教育」であった。

1．研究目的

これまで筆者は主に大学院生の臨床教育で「感性教育」を実践し、その具体的な方法についても試行錯誤してきた（小林、2017c）が、大学院では対象数も限られていたため、これまでに得られた知見をさらに確実なものにするために、より多くの対象に実施することの必要性に迫られた。そこで今回、大学院生ではなく、学部１年のより多くの学生を対象に「感性教育」を実施し、その効果について検討した。

2．研究方法

（1）母子交流場面の観察

新奇場面法（SSP）で記録された１歳０ヶ月の男児とその母親の交流場面を対象学生に供覧し、その観察記録をまとめる際に、次のような二つの課題を与えた。その際、最初の課題として①を課した。その直後に課題②を課して、再度観察記録をまとめるように指示した。二つの課題は以下の通りである。

①最初は、子どもに焦点を当ててみてください。そこで子どもにどのような特徴があると思いましたか。子どもの特徴をタイトルにして「　　」に記載してください。ついで、その根拠を思いつくまま自由に述べてください。
②つぎに、母親と子どもの関係に焦点を当ててみてください。そして、母子関係の特徴をタイトルにして「　　」に記載してください。ついで、その根拠を思いつくまま自由に述べてください。

なお、学生が課題①の記録をまとめた後、その後（同日に）、課題②を与え、再度同一事例を供覧した。

（2）供覧事例

今回学生に供覧したのは下記の事例[1]である。SSP にみられる母子関係の概要を紹介する。ビデオ供覧の前に学生には以下の内容の主訴と発達歴を提示することで、予備的情報を与えている。

●1歳0カ月　男児

知的発達水準　境界域精神遅滞（DQ80）

主訴　泣いてばかりであやしても笑わない、抱きづらく抱くとのけぞる、視線が合わない、人見知りが激しく人を寄せつけない。

発達歴　仮死、吸引分娩。新生児期、授乳中のけぞったり母の手をふりはらう、視線が合わないなど母子間において子がしっとり甘えるといった関係が乏しかった。子はよく泣き、母乳を飲んだあとも泣き続けることが多かった。あやしても笑わない、抱いてもすぐにのけぞるので母は疲れやすかった。生後5ヶ月、指しゃぶりが始まる。指しゃぶりによって泣き叫ぶことが減った。子は、抱かれることを嫌がり、仰け反ってすぐに降りていた。そして、一人で横になって指しゃぶりをして寝てしまうことも少なくなかった。夜は30分から1時間おきに起きては激しく泣く。子どもの多い場所へ連れて行くと嫌がって泣く。真似をまったくしようとしない、人見知りが激しく、周囲へ

[1] 拙著『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』事例2（pp. 55－59）

の警戒心が強い。初回面接で、母親は、「この子を赤ちゃんらしく感じたことがない」と語っているのが印象的である。

SSP にみられる母子関係の概要

最初に母子二人で過ごしている時の子が母の働きかけに対して無視するように背を向けてボールテントのボールを手にして遊んでいるが、子は一人で楽しんでいるようには見えない。母に対して無視するような態度を取っているのは、「拗ねている」といってもよい態度である。ストレンジャー（以下ST）が入ってきた途端に、母は子に挨拶を促すが、子は応じる気配はない。なぜか母はそんな子の頭をさかんになでている。そのことが筆者に違和感を抱かせた。母が退室して ST と子の二人きりになると、子は ST を非常に意識しながらしばらく考え込むようにして動きが止まっていたが、ST に気を遣うようにして自分の手を差し出して ST を自分の方に誘うような仕草を示す。それに呼応して ST が子に近づき、子が手で触っていた車のクラクションを ST が押して鳴らした途端に、子のそれまでの不安と緊張が一気に爆発するようにして表情に不安が走り、泣き始め、どんどん泣き方は激しくなっていく。ST が抱きかかえて慰めようとするが、子は拒否するようにして身体をくねらせている。ずっと泣き続けていたが、母が戻ってきて、母に抱かれると途端にすとんと泣き止むとともに、母と入れ替わりで部屋を出て行こうとする ST の後ろ姿をずっと目で追い続けている。母はさかんに子の頭をなでながらなだめているが、まもなく子はぐずり始めて身体をねじらせて抱かれるのを嫌がるようにして降りていく。すると自分一人で再び遊び始める。母がいなくなるのに気づくと、しばし様子をうかがいながら周囲の気配を感じ、次第に不安げな表情を浮かべて泣き始める。④の時よりも激しい泣き方になったので、すぐに母に入室してもらった。

母に対して甘えたいにもかかわらず、どこか「拗ねていて」自分から甘えようとしない。一人ぼっちになってもしばらくの間は心細さを感じながらも自分一人で周囲の様子を窺うようにしているが、この不安と緊張には耐えられず、ついに泣き始めている。それにもかかわらず、母との再会では抱かれはするが、そこにしばらく身をゆだねることはなく、むずかるように嫌がっ

て降りてしまう。

母の前では自分の「甘え」という弱みを極力見せまいとする態度が顕著であるが、母はなぜ子の頭をさかんになでているのであろうか。そこに母の子に対する思いが強く反映していることがうかがわれる。なぜなら「撫でる」行動は子が何か母から見て褒めたくなるような親の期待に応える行動を取った時に行うものであるが、子はけっして褒めたくなるような行動を取っているわけではない。それでも母が思わずそうした行動を取っているということは、母の子に対する「こうあってほしい」という願いの強さの反映ではないかと思われる。普段の社会生活の中では他人様の前で母の期待するように振舞ってくれないということが母の主たる悩みであることを考えると、いかに母が子に自分の期待を掛けているかがわかるし、そうした期待に子も応えようとする一面がある。それはSTに対してなんとかして相手をしようと努めている④における子の振舞いに見て取ることができる。

子は母に対して「拗ねた」行動を取っているが、いざ母子分離になると、抑えていた不安に耐えきれなくなり、母を求める。しかし、いざ母と接する段になると、途端に回避的反応を示している。ここに事例の母子関係の特徴が端的に示されているように思われる。

（3）ある学生の感想文を読んで気づいた感じたことを述べる

以上、同一事例を2回供覧した後、前年に同じように「感性教育」を2年の学部生に試みた際に、筆者が期待している学生のモデルとして選んだ、ある学生（A子、学部2年）の感想文を例示し、以下の課題を与えた。具体的には次の内容である。

課題「先ほどある学生（A子）の感想文を紹介しましたが、自分のそれと比較したとき、なぜ違いが生まれたのか、自分で気づいたことを中心に、感じ考えたことを率直に述べてください。自分の観察の特徴に気づくことが大切であって、けっして正しい答えを要求しているのではありません。自分をより深く理解することが最大の目的ですので。」

A 子（学部 2 年）

「ビデオ供覧の母子関係を観察した感想」

子どもの中途半端な甘え方が何よりも私は気になった。子どもは、母親に一人でボール遊びをしているときに声をかけられたり、一緒に遊ぼうと近づいてこられたりしてもほとんど反応しない。しかし、遊んでいる途中に急に両手を上に伸ばして母親に抱っこを求めたり、母親がいなくなったことに気づくと急に不安になって大声で泣き出したりしている。母親が近くにいる時は半ば母親を無視するような素っ気ない態度をとっているのに、いざ母親がいなくなってしまうと、それまでとは打って変わって心細そうな様子になるのが非常に不思議だったし、印象的であった。

わたしがこのビデオを観てこの子の心情を想像すると、以下のようになった。この子は普段母親がそばにいる時は、「僕はお母さんが近くにいなくても大丈夫だ」と母親に対して意地を張っている。しかし本当は、母親がそばにいないと不安でたまらない。そのため、母親が自分から離れて行くと抱っこを求めたり、母親が見えなくなってしまったりすると、泣き叫んでしまう。その後母親が自分を抱きしめてくれると安心するし嬉しいけれど、甘えたり泣いたりしてしまった自分が恥ずかしく、なんだかきまりが悪いため、母親とうまく目を合わせられなかったり、母親との体の密な接触を避けようとしたりしているのではないだろうか。ボールや指をよく咥えたり吸ったりする仕草は、この子が母親に対して上手く甘えられないストレスを表しているのではないかと思った。

また、子どもに対して、母親がことあるごとにしきりに頭を撫でていることが私はとても気になった。自分が出て行ってしまい寂しい思いをさせてしまってごめんね、とあやす「よしよし」は理解できるのだが、単に遊んでいる子どもの頭を何度も撫でる母親には少し違和感を抱かざるを得なかった。普段から仲の良い親子がコミュニケーションの一環といて子どもを「よしよし」するのであれば特に疑問を感じないのだが、この親子の間には身体的な距離だけではなく精神的な距離もあるように感じたので、あのどこか不自然でぎこちない「よしよし」は強く印象に残っている。おそらくだが、この母親はどうにか子どもと上手く付き合いたい、子どもに懐いてほしいと強く願う一方、子どもと

の距離が縮まらない現実に対する焦りから、あのような行為をしたのだろう。

お互いの気持ちを分かり合えないまますれちがってしまっている二人の様子は、見ていて切なかったし、もどかしかった。どのような経緯で現在のような親子関係に至ったのか私には分からないが、まだ1歳になったばかりの子どもが母親に対してあのような態度をとる様子は今まで目にしたことがないので、少し驚かされた。もしかしたら以前、構ってほしい時に母親に十分に相手をしてもらえなかったり、寂しい思いをさせられてしまったりしたことがあったのかもしれない。どのような理由があるにせよ、今後、親子間で長いスパンで二人の距離を上手く縮めて行く必要があるだろう。

【筆者がこの感想文を見本に選んだ理由】

この学生はSSPのビデオをこれまで観たことがなく、今回が初めての経験である。しかし、自分が感じたままとても自然に自分の思いをわかりやすい表現で述べていることに筆者はとても感心した。

なにより感心したのは、ふたりの間に流れている空気を感じ取って、「この親子の間には身体的な距離だけではなく精神的な距離もあるように感じた」と表現している。それをもとに、具体的に「母親が近くにいる時は半ば母親を無視するような素っ気ない態度をとっているのに、いざ母親がいなくなってしまうと、それまでとは打って変わって心細そうな様子になる」こと、「単に遊んでいる子どもの頭を何度も撫でる母親」を取り上げて、そこに違和感を抱いている。

これらの具体的な様子から、この学生はつぎのように推測している。「構ってほしい時に母親に十分に相手をしてもらえなかったり、寂しい思いをさせられてしまったりしたことがあった」のではないかと。

「関係をみる」際に、まずは二人の間に流れている空気を感じ取ることができると、具体的に母子間で行われている様々な仕草の意味をこのようにごく自然に違和感をもって理解することができるとともに、とても説得力のある推論へと進んでいることがこの感想文にはよく示されている。

この学生は、この母子関係の特徴を実に適確に把握していると言ってよい。

（4）事例の母子関係についての解説

ついで、この事例の特徴について、筆者から再度ビデオを供覧しつつ、先に示した「SSP にみられる母子関係の概要」に沿った内容を解説した。よって、学生たちは計 3 回同一事例を見たことになる。

（5）これまでの「感性教育」との違い

筆者が考えている本来の「感性教育」では、少人数での対話を重視し、そこでの体験によって学生自身が人間観察において自らの感性を働かせる上で、いかなる要因が阻害ないし歪みをもたらすかを自らの気づきとして体験してもらうことであった（小林、2017c）。

このような方法は少人数で初めて可能であるが、今回は 60 名もの多数の学生を対象としたゆえ、対話を実施することは不可能であった。それに代わって、ある学生の感想文を例示して、各自の感想との違いを振り返ってもらうことによって自ら気づいたことを感想として自由に記述してもらうという方法をとった。

（6）倫理的配慮

供覧する録画ビデオについては、母子ユニットで実際に臨床を実施した際に、両親に対して本録画データを研究と教育に用いることについて文書で同意を得たものである。

学部生にはビデオ供覧に際して、その内容の録画と録音をしないこと、ならびに患者に関する情報の守秘義務を遵守することを文書にて誓約してもらった。対象となった学生は現実に教育現場で実習教育を経験し、そこでは現場の職員に準じる資格で実習に従事し、その際守秘義務が課せられているという理由に依っている。

今回の結果については学生の匿名性を十分に配慮し、任意に番号を割り当てた。特定化できる恐れのある箇所は削除した。

3．研究対象

本研究は、ある年度の学部1年後期科目「医学一般Ⅱ」の講義で実施したが、その際の出席学生（主に18歳から19歳）は計63例（男女比27/36）であったが、記載内容の不備が目立ったものは無効データとして今回の対象から除外した（3例、男/女＝2/1）。よって、本研究の対象は60例（表1）である。なお、男女比は25/35、男性が41.7%、女性が58.3%を占めた。

表1：対象

性別	男性	女性	計
対象数	25	35	60
%	41.7	58.3	100

＊無効データ3例（男/女　2/1）除外

4．研究結果

（1）学生たちは子どもあるいはその母子関係をどのように観察し、評価したか

学生たちは子どもあるいはその母子関係を観察して、どのような感想をもったか。その結果を検討するために、筆者は大まかに、子どもないしその母子関係に特に大きな問題を感じ取れなかった群を肯定群、理由はよくわからなくてもなんらかの問題を感じ取った群を否定群ないし両価群として分類した。2群に分類する際には、タイトルのみならず、その根拠をすべて読んだ上で評価した。

a）学生による母子関係の評価

子どもに焦点を当てた観察の後に、その母子関係に焦点を当てることによって、見方が大なり小なり変化したことを述べた学生は多かったが、両者の観察結果内容から、筆者が評価し、2群に分けた。

その結果（表2）、肯定的評価群は25例（41.7%）（男/女＝9/16）、否定的/両価的評価群は35例（58.3%）（男/女＝16/19）であった。

表2：母子関係の評価

母子関係の評価	肯定的	否定的/両価的	計
例数	25	35	60
%	41.7	58.3	100

b）男女別にみた母子関係の評価

これを男女別に分けて再度検討すると、肯定群が男性 9 例（36.0%）、女性 16 例（45.7%）と、肯定的に観察し評価した学生は、女性の方が多い傾向が認められた（$\square^2=0.566$、$p<0.5$）。

表 3：性別による母子関係の評価

性別	男性		女性		計
母子関係の評価	肯定的	否定的/両価的	肯定的	否定的/両価的	
例数	9	16	16	19	60
%	36.0	64.0	45.7	54.3	100

c）学生は子ども、母子関係の特徴をどのようなタイトルで表現したか

以上の結果について、両群の学生が具体的にどのようなタイトルを記載したか、その内容を表 4、表 5 に示した。

表 4：肯定的評価群の観察タイトル

No.	性別	子どもに焦点を当てた観察	母子関係に焦点を当てた観察
7	男性	人見知りする乳幼児	薄弱な母子関係
9	男性	母親・子	普通の親子
11	男性	いろいろなものに興味関心があり、突然泣き出すこともある子ども	ストレンジャーだと泣き止まないが、母親だと落ち着きを取り戻す子ども
12	男性	ママ好きな元気な男の子	親子のきずな（愛）
13	男性	母親への愛	強い愛
15	男性	寂しがり	実はお母さん大好き
19	男性	母親が一番	順風満帆
21	男性	何にでも興味がある子ども	子どもは母親のことを理解している
22	男性	警戒心が強い、情緒反応は激しい	母に依頼する
26	女性	人と関わるのが嫌いな子	母親だけ
30	女性	無邪気で自由奔放	確かな親子関係
31	女性	人に慣れていない赤ちゃん	子どもが心配
32	女性	人見知りする子ども	実母が子どもに与える安心感
33	女性	天真爛漫な幼な子	互いが十分に信頼し合えている二人
35	女性	お母さんがいないと不安	母子分離をすることで気づいた信頼関係
36	女性	母親以外の人への警戒心が強い子ども	気を許せる関係
38	女性	警戒心が強い	母子関係は良好
40	女性	一人で遊ぶけれど一人ぼっちは寂しい子ども	信頼関係はあるが必要な時だけ
46	女性	区別はつくが関心がうすい（子ども）	子どもの反応はうすいが、一般的な母子関係
48	女性	おとなしい	普通の親子
49	女性	子どもを安心させるのは母親しかいない	信頼関係
51	女性	お母さんはいなくならない？－見えづらい子どもの気持ち－	大切な存在
55	女性	子どもらしい	信頼関係
57	女性	お母さん大好き	近い距離感
60	女性	大きな反応がない	安心感

表5：否定的・両価的評価群の観察タイトル

No.	性別	子どもに焦点を当てた観察	母子関係に焦点を当てた観察
1	男性	赤ちゃんらしくない赤ちゃん	親の心子知らず
2	男性	母親への共依存	離れられない存在
3	男性	人見知りで、感情のコントロールができない	母親に甘えない子ども
4	男性	母親への執着	80% の信頼
5	男性	母親がすべて	子どもから離れられない
6	男性	母の存在が不可欠すぎる子ども	微妙な距離感がある母子関係
8	男性	感情の動きが激しい子ども	お互いをよく理解していない関係
10	男性	喜びの感情が無い子ども	お世話係のような母親の存在
14	男性	実はお母さんといたくて甘えたい	さぐり合い、すれ違い、必要性
16	男性	障害？を持った男の子	未完成な親子愛
17	男性	特技は泣くことです	一方通行
18	男性	自己中心的な子ども	意思疎通ができない（母子関係）
20	男性	母親の気を引きたい子	子の自主性を尊重しない親と、それに言いなりの子
23	男性	極度の甘えん坊	将来の不安
24	男性	子ども独自の世界	母親と子どもの信頼関係
25	男性	閉じた空間を好む子ども	母親に気持ちをうまく表現できない子ども
27	女性	大人びた子	焦る母親
28	女性	甘えることが少なく、自立している赤ちゃん	子どもと接するのに疲れている、子どもに従う（母親）
29	女性	ママ、そばで見守って。一人で遊ぶから。	ずっとそばで見守ってね。見守っているよ。
34	女性	親への独占欲？原因不明の大泣き	親にいてほしいというより、いて当然のような動き
37	女性	コミュニケーション力がない	・・・
39	女性	お母さんと一緒	近い距離感
41	女性	母を認識	母の存在
42	女性	好奇心が低い子ども	希薄だが確かな親子関係
43	女性	激しすぎる人見知りの子ども	母親を信頼しているが笑顔を見せない子
44	女性	お母さん、どこにいるの	母子、一心同体
45	女性	ハイハイで動き、少しの音に敏感だが、母とボールが好きな普通の子	新米ママは心配性
47	女性	人見知りでさびしがりな男の子	互いに嫌いではないが、信頼関係が不十分な親子
50	女性	他者との関わりや自己表現が少し苦手な子	温度差はあるが互いに大好き
52	女性	気ままな子ども	一方的な関係
53	女性	母親がいないことへの不安感	近くて遠い母子の関係
54	女性	？がいっぱい	まだ模索中
56	女性	母親がいなくなると泣く	常に子どもに意識を向けている
58	女性	わけがわからない	他人？
59	女性	母親の区別が出来る子ども	子には母が必要

（2）学生たちは見本の感想文を読んで、どんなことに気づいたか

a）肯定的評価群

具体的に、典型例と思われる学生の気づきを以下に列挙する。

なお、例示にあたり、括弧内の最初の数字は任意の整理番号、「タイトル」は前者が「子どもに焦点を当てたもの」、後者が「母子関係に焦点を当てたも

の」、さらにその〈根拠〉、最後にA子の感想を読んだあとに自分自身で気づいたことを「タイトル」を付けて自由に記述してもらった。傍点は筆者がつけた。

なお、以下例示する学生の感想文のタイトルは、筆者がその内容に相応しいものを考案して付したものであることを断っておく。

(11男性)**「いろいろなものに興味関心があり、突然泣き出すこともある子ども」「ストレンジャー（以下ST）だと泣き止まないが、母親だと落ち着きを取り戻す子ども」**

〈根拠〉母子分離で、母親と子どもが離され、STが入室して遊んでいたが、突然泣き出し、泣き止むことはなかったが、母親が戻ってきて抱っこしていると、だんだんと落ち着いているように見えた。

「自分の観察で足りなかったのは何か」

自分は子どもの甘え方を意識していなかった。子どもの行動や態度ばかり意識してしまい、甘え方については少し触れただけで、行動や態度についてあまり書いていなかったと思う。また、A子さんの感想文には細かいことまで書かれていて、それが何を表しているのかというところまで書かれていた。子どもの細かい特徴を見て、それについて子どもが何を思っているのか、何を考えているのか、A子さんなりに推測していた。僕はほんとうに行動や態度だけを見て、それはどういう気持ちで子どもはその行動や態度を取っているのかまで考えられていなかった。そこが一番の違いだなとA子さんの感想文を見て感じた。

(13男性)**「母親への愛」「強い愛」**

〈根拠〉お互いの愛が深いと思った。子どもはそれほど甘えてないが、親がいなくなってからは、頻繁に母親を必要としているのがわかる。

「自分にも同じような経験がある」

実際、私にもそういった反応（子どもが母親に対して背を向けて意地を張っている態度を取っていること）をする時がありました。母親がいて、母親の方

から私を求めてくる時、（私は）少しアッケラカンな（無視するような？）態度をとったりしていました。（しかし、）いざ母親があきらめたようにして（私に）冷たい態度をとって接すると、（自分が母親から）とても嫌われているような気持ちになって、不安になってしまいました。やはりそういった気持ちは誰にでもあると思います。

（15 男性）**「寂しがり」「実はお母さん大好き」**

〈根拠〉母親と遊ぶというよりも、一人で遊んでいるといった方が正しいように思えた。しかし、時折、母親のことが気になり、少し寂しそうな状況も見られた。そして、母親が部屋を出た後は、泣きやまない様子から、お母さんが好きなのかと思った。その後、母親が帰ってきたのちに、落ち着いたことから本当にお母さんのことが好きだと思った。

「幅広い視点から考えることの大切さへの気づき」

私は前回までは普通の赤ちゃんと同じなのではないかと感じていた。しかし、今回の講義で先生が指摘した母親の遊びに興味を持たない点、母親と目を合わせようとしない点から、母親の気持ちになって考えてみると、母親は大変つらい思いをしていることに気づくことができた。だから、相談する決心をしたのではないかと考えた。

母親にあまり興味を示さないことは、我が子を愛する親の立場になって考えた場合、それ以上につらいことはないのではないかと私は思う。母親も子どもから愛を受け取りたい気持ちでいっぱいなのではないかと考えた。

今回は指摘された所に着目してビデオを見ることで、これまでと違った感じ方、考え方をすることができた。ここから幅広い視点から考えることが大切だと気づくことができた。

（19 男性）**「母親が一番」「順風満帆」**

〈根拠〉子どもは泣かずに母親と遊んでいて楽しそうだったのと、泣いても母親は冷静に泣き止ませることができたから。

「母親の存在の大切さ」

私の観察として、子どもが頻繁にする指をくわえ吸ったりする行為は、甘えたいという意味を表しているのではないかと思った。こういったことから日頃の母親の子どもに対する愛情が足りていないと少し感じた。

子どもにとっては母親の存在がとても大切だということが、子どもの抱っこを求める行為は母親が近くにいないと泣くという行為からわかった。全体的に見て、この親子の関係はあまり「良い」とはいえる状態ではないと思った。

(21 男性)**「何にでも興味がある子ども」「子どもは母親のことを理解している」**

〈根拠〉途中で母親がいなくなったことに気づいて、不安になって、泣いて、母親を探しているという風に見えたため、小さい子どもでもきちんと母親のことを理解している。母親が戻ってくると、安心して泣き止み、静かになった、親子は必ず一緒にいなければならないんだなと感じた。

「新たな発見の喜び」

A 子さんの感想は、子どもと母親の関係について違和感を感じる、子どもが母親に対して甘え方が気になったとありましたが、私は、子どもが母親に安心していると思い、(そのように)感想を書きました。もう一度よく考えてビデオを見ていると、たしかにボール遊びの時などに母親の顔を見ずに、一人で遊んでいたことがわかりました。母親がなぜ子どもの頭をこんなにもなでているのか、子どもはさびしさを感じていたのかもしれないとあらためて思い、新しい発見ができてとても勉強になりました。

(26 女性)**「人と関わるのが嫌いな子」「母親だけ」**

〈根拠〉子どもは母親とすすんで遊んだりしないが、近くにいても泣かないし、おとなしく遊んでいる。ST と二人になると、急に泣き始め、抱かれるのもとても嫌がる。泣き叫ぶ。

「母親が子どもの頭をさかんに撫でる違和感を考える」

A 子さんの感想を読んで、母親が必要以上に子どもの頭を撫でることに違和感を感じ、またそれが、母親が子どもとの距離を縮めたくても叶わないことに対する焦りからくる行動であるというのは、(私と)意見が同じで驚きました。

私たち人間が飼っている犬や猫といったペットの頭を撫でるという行動に重なり、母親にも子どもの接し方で不適切な部分があるのではないかと思いました。遊ぶ内容に関しても、子どもの好きなように遊ばせ、それに付き添う程度で私はいいと思うのですが、この母親は車で遊んでみようとか、ボールをプールの中に入れてみようと、（自分の遊び方を）押し付けていてよくなかったと感じます。（知能の発達を促しているように感じられました。）子どもはそういう母親に頑張りすぎ、張り切りすぎた感じを無意識に感じ取り、母親といることに少し息苦しさを感じているのではないかと思いました。（たしかに）ストレンジャーよりは（母親と）一緒にいて（多少なりとも）安心はするけれど、一緒に遊んだり構われすぎたくないような印象を受けたのはそのためかなと思います。

（30 女性）**「無邪気で自由奔放」「確かな親子関係」**

〈根拠〉母親が同じ部屋にいるときは、安心して子どもは遊んでいた。母親に抱きかかえられても泣かない。ST と二人きりになった途端、泣き出した。母親の時とは異なり、ST が抱くと泣いた。そして泣いて言える子どもを母親が抱くと泣き止んだ。子どもは母親を確実に信頼している。そこには確かな親子関係があるといえる。

「見るたびに新しい発見がある」

今日の授業で、私はA子さんの感想文や先生の解説を聞いた後、もう一度ビデオを見ると、自分の注意力のなさに気づいた。180 度と言っても過言ではないほど見方が変わった。そもそも私はビデオの中の男児が母親を遠ざけながら遊んでいることに気づかなかった。ただ、子ども特有の「自由奔放」という言葉で片付けていた。A子さんの感想文の中の「自分は一人でいいよ」という強がりの部分からその行動が出てくるのでは？という意見に私は非常に納得した。強がっているけれど、いざ一人になると不安になったり、母親に甘えてみたり、子どもらしい一面もある。だから強がっているという言葉が自分の中でしっくりきた。

また、母親とこの男児の関係性の見方も大きく変わった。母親は男児に嫌わ

れないように、また好かれるように気を遣って接しているのが見受けられた。二人の間には心から相手を思いやっている信頼関係がうまく築けていないのではないだろうか。お互いがお互いに遠慮している部分があると思う。このビデオはかなり興味深い。見るたびに必ず新しい発見がある。自分の注意力や理解力の向上につながる良い授業であると思った。

(33 女性)**「天真爛漫な幼な子」「互いが十分に信頼し合えている二人」**

〈根拠〉音や動く物に敏感に反応しては、そちらに興味を示す。母親の退室後、泣き始め、戻ったときには泣き止む。(退室する間はずっと泣き続ける。)以上の子どもの行動から、この子は外界への感情表出がうまくでき、母親がいる間は自由に自分の時間を過ごせているため、母親から十分な愛情を受け、かつ信頼関係を築けていることがわかる。並びに、母親による虐待などはないと推定できる。

「何かしら感じていた“壁”という違和感の意味に気づかされた」

私はこの親子の間に何かしらの“壁”を感じていた。だがそれが何なのか、どうして感じるのか、そういった疑問を追求する努力をしなかったことが、感想を述べたA子さんと私の違いだと気付いた。A子さんは、自分の疑問を打ち明けるだけではなく、その疑問に対する自分なりの答えを、自由に想像を膨らませて述べ、解き明かそうとしている。一方、私は表面的な、誰にでもわかるようなことをかき集め、「多分、こうだろう」と、無理矢理この親子の関係を文字にしようとしていた。自分の感じた“壁”を追求せず、目の前の親子を、その人たちのことをよく理解しないまま、「･･･な親子だ」と、決めつけるようなことをしていたのだ。A子さんの文章を読んで、自分が楽に、簡潔に、親子を知ろうとしていた愚かさに気付いた。自分の感じた違和感をもっと大事にして、それが何かを追求する努力が私には足りなかった。相手をより深く理解しようとする気持ちと、相手の気持ちや心理状況を推測するまでの想像力が、私には必要だ。この先、人と関わる一人の人間としても･･･。

(35 女性)**「お母さんがいないと不安」「母子分離をすることで気づいた信頼関係」**

〈根拠〉このビデオを見る限り、母親に会うと泣き止んでいる。

「見るたびに新しい発見がある」

抱っこされたら泣き止むという点に注目しすぎて、男児が抱っこされても母親にしがみつかないということに気づかなかった。ボール遊びの時に、母親の方を見ていないのには気付いたが、母親がいる方にはボールを投げていないということには気づくことができなかった。私は音や表情などの観察はするが、抱っこの仕方やボールの投げる方向までは気づくことができなかったので、音声を交えている（言葉を交わしている）ところに注目しやすいのではないかと思う。

このビデオを何回も見て、回を重ねる毎に、新しい発見ができて面白かった。

母親がいないと泣くのに、母親が（目の前に）いたら素っ気ない態度をとるのは不思議だ。まだ話せない歳だから気持ちを読み取るのは難しいが、だからこそ不安や心細いという感情が生まれ、このような行動になるのではないかと考えた。

（46 女性）**「区別はつくが関心がうすい（子ども）」「子どもの反応はうすいが、一般的な母子関係」**

〈根拠〉母親の声に反応する。区別ができている。母親が抱っこすると泣き止む。

「なぜこの母子に信頼関係があると思ったか」

私は（最初）このビデオを見て、子どもと母親の間には信頼関係があると思っていました。たしかに母親の行動は少しぎこちなく、子どもに気を遣っているように見える場面もいくつかあったが、（ビデオカメラで）監視（観察？）されているから普段よりもオーバーに接しているだけなのかと思っていました。

子どもの行動は素っ気なく、母親の顔をあまり見ないが、不安になると泣き、抱っこされると安心して泣き止むということから（2 回目も）同じ感想を持ちました。子どもがうまく甘えられない、意地を張っているという推測まではしていなかった。一般的な 1 歳 0 ヶ月の子どもがどんな行動をするのかという知識がなかったため、子どもの異変に気づくことができなかったと思う。

(48 女性)**「おとなしい」「普通の親子」**

〈根拠〉子どもがSTより自分の母親になついているところから、私には普通の親子に見えた。特徴としては、母親が子どもに「遊び」を提案しているように見えた。

「『普通の親子』だという思い込み」

最初、このビデオを見た時、私はこの親子の距離感に気づくことができなかった。少しぎこちないけれど、どこにでもいる「普通の親子」だと思ったからだ。しかし、最初のこのような「思い込み」が生まれたせいで、この親子の細かい行動に気づけなかった。私はこのような思い込みが激しい部分がある。一度こうだと思えば、物事を別の角度で見ることができなくなるのだ。しかし、何度も見ることによって、また、A子さんの感想文を読むことによって、最初に見えていた「親子」とは全く別の「親子」を感じ取ることができた。子どもを遊ばせようと必死な母親、子どもに好かれたいという思いが強い母親。この母親も私と同じで、思い込みが強い部分があると思った。「普通の子どもはこうだから」という考えがあるため、自分の子どもの本心に気づけていないと感じた。この母親は「普通の親子」に対する固定観念が強いせいで、子どもとすれ違い、距離が生まれてしまったのだと思う。焦りからそうなってしまう部分もあると思うが、「普通の子ども」ではなく、「自分の子ども」としてコミュニケーションをとることが大切だ。

(49 女性)**「子どもを安心させるのは母親しかいない」「信頼関係」**

〈根拠〉母親が抱っこするのとSTが抱っこするのとでは全然違ったから。母親には甘えて、落ち着いたら指しゃぶりを始めた。STには抱っこされてもいやいやと首を振り、降りようとしていた。母親がいるという安心感があるから、ボール遊びができる。抱っこしたらすぐに泣き止む。STの顔はあまり見ないで、母親の顔はよく見ていた。母親から呼ばれただけで、母親のことがわかっていた。

「何回も見ることによって気づくことができた喜び」

私は子どもと母親の表面上の行動しか見れておらず、内面的な感情が全然書

けていませんでした。A子さんや先生は、子どもがボール遊びをしている時に、子どもは母親がいる方とは反対側にボールを投げていることに気がついているのに、私は気づけていませんでした。子どもは何も考えずに行動しているのではなく、行動一つひとつに意味があることがわかりました。

1回目の観察から先生が話されたポイントを押さえながら、2回目、3回目と動画を見ていくうちに、1回目では気付けなかったことに気づけて、それに喜びを感じたとともに、もっと気づくことは何かと意欲的にビデオを見ていました。A子さんのように子どもの心情を私は考えることができていなかった。またそこから見られる親子関係もしっかりと把握していなかった。ただ甘えている、ただイヤイヤとしているのではなく、その行動の裏にどのような心情があって、そうしているのかを考えながら、もっと深く観察すればよかった。そしたら、A子さんとは違った意見が出せたのではないかと思った。

(57女性)**「お母さん大好き」「近い距離感」**

〈根拠〉母と子の二人の時は、母は子に近い場所で頻繁に声かけをしていた。子は母の距離が近かった時は、ボールプールにしか興味を持っていなかったが、母が一旦離れるといろいろな場所に動き始めた。母の距離がずっと近いことから、周囲の人と関わる機会が減り、人に慣れるということがあまりできていないのではないか。STと二人になったときに泣きだすのは、そのような理由があると思う。泣いたら、母がすぐに抱き上げに行くことから、泣いたら母が来てくれるということがわかっているから、泣いているのではないかと思う。

「一度思い込むとそこから容易に抜け出せない」

A子さんは広い視野を持って細かいところまでよく見ていると思いました。

私は、一度最初にこうだと思ったら、なかなかその考え以外のことを考えることができず、視野が狭くなっていく傾向にあるので、気づくことができた事柄がA子さんに比べたら少ないのだと思います。

視野が狭くなるからこそ、子どもの視点から見始めたらそちらの方だけ、母親の視点で見始めたら母親の方だけに集中してしまうので、母親と子どものすれ違いという部分には気づくことができなかったのだと思います。深く考えて

いくことも苦手なので、指を吸ったりすることが、うまく甘えられないストレスの表れだとか、母親の焦りからくる頭を撫でる行動だとかいうことは、先生の説明や学生の感想を聞いて、なるほどと思いました。いろいろ説明を聞いた後に再度見直してみると、今まで自分ではあまり何も思わず見過ごしていたところも、実はこういうことなのではないかと新たに発見することができました。

b）否定的/両価的評価群

否定的/両価的と評価した群で、典型例と思われる学生の気づきを以下に列挙する。

（3男性）**「人見知りで、感情のコントロールができない」「母親に甘えない子ども」**

〈根拠〉母親と一緒に遊ぶときも、子どもは一人で淡々と遊び、笑顔一つない。母親が抱っこをしても嬉しそうではなく、むしろ嫌がる態度を示す。普通の子どもなら親に甘え、泣くこともあるし、ニコニコしているイメージがあるが、この子どもは赤ちゃんらしくない。まったく知らない人よりかは母親の方が落ち着くかもしれないが、だからといって母親にべったりとくっつくこともなく、泣く以外の感情が見られない。母親は懸命に子どもと接触を図り、母親らしくしようとするが、子どもはその期待に応えることはない。しかし、一人にされると、泣いてしまう。

「病的な子どもという先入観から子どもらしい一面を見過ごす」

最初にこのビデオを見た際、（発達歴が記載された配布資料から）この子どもは病気を患っている（何かの障碍を持っている）と聞いていたので、普通の子どもとは少し違う点があるのだと若干偏見（先入観）を持ちながら見てしまいました。人見知りが激しく、落ち着きがないという他の子どもとは違うところばかりに目が行き、A子さんのように、甘えている部分や抱っこを求めるといったような他の子どもと同じような子どもらしいこともしていたということに気づきませんでした。

このことから、自分はある一つのことに集中してしまうと周りが見えなく

なってしまうタイプなのだと気づかされました。確かに、友達の話を聞くのに集中し過ぎてしまい、反対方向から歩いてくる人にぶつかったり、車に轢かれそうになったりすることがあり、友達からよく“天然だね”と言われることが多いです。そのため、いろいろなところに気を配らないといけない車の運転などで特に注意しなければいけないと思いました。

A子さんや先生の話を聞き、ようやくこの子どもがどのような態度や思いで母親と接しているのかがわかりました。「子どもはうまく甘えることができず、母親はどうにかそんな子どもとうまく付き合いたいと思い、不自然な行動をしている」ということが、ビデオを見て、最終的にわかりました。

（4男性）**「母親への執着」「80％の信頼」**

〈根拠〉遊具選びの際、ある程度のコミュニケーションはとれていた。しかし、顔を合わせ、目を見てコミュニケーションをとっているわけではない。泣いている際は、抱っこなどを拒絶しているため、まだ完全に信頼関係を築いているとは言い切れない。

「ただ母親を求める赤ちゃんの映像だと決めつけていた」

A子さんの指摘を受けて、改めてビデオを見ると、全く違う展開があることに気付いた。自分はただ母親を求める赤ちゃんの映像だと決めつけ、全く注意力がないことに気づかされた。赤ちゃんの表情、仕草だけではなく、母親の接し方にも違和感を抱いた。

単なるビデオではなく、奥深いところには、二人の関係性にも簡単には表せない“何か”が存在している。その“何か”は、二人に、精神・身体面で距離を生み出しているといえる。

母親の接し方を見るに、普段から愛情は与えている。だが、二人とも気を使っているように感じられ、ぎこちないコミュニケーションであることに、今、気づかされた。

結局、自分がビデオを視聴した時、その違和感に気づくことは何もなかった。つまり、二人の表情や仕草に注意を払わずに、あくまで二人の表面上の行動を見ていたにすぎない。A子さんの感想を読むまで、今の心境とは全く異なる

「信頼を抱いている」という感想を持っていたことは問題であると言える。これからは行動だけではなく、細かい仕草などに関心を寄せ、本当に意味していることを見抜けるように頑張りたい。

（8男性）**「感情の動きが激しい子ども」「お互いをよく理解していない関係」**

〈根拠〉子どもが遊んでいる際に、母親がボールを転がしたりしているが、あまり関心を示さず、一人の世界に入り込んでいるようだった。子どもが自分に興味を持たず、無視しているような形になっていて、母親はどうしたらよいか、わからなくなっているようだ。

「周囲のものにも関心を持つ観察の必要性」

A子さんの感想文を読んで気付いた点が2点ほどあった。

一つ目は、（SSP②の前半）子どもがボールで遊んでいた場面である。ボールで遊んでいる時に、母親に興味を示していないということは、最初の観察の際に気付いていたが、ボールを母親がいない方向に転がして遊んでいたことに気づかなかった。私は、子どもと母親の二人を観察するという目的にとらわれて、子どもが遊んでいたボールにまで注意が向いていなかった。

二つ目は、母親が戻ってきて、STが部屋から出て行った際に、母親に抱かれながらしていた指しゃぶりである。私は指しゃぶりが子どもの癖であろうと判断して、特に気にすることはなかった。しかし、A子さんの推測を読んで、子どもが母親に対してストレスを抱えているのではないかという考え方もあるんだなあと思い、A子さんとは見方や物事に対する考え方のレベルの違いを感じた。

以上2点から、その目的のものだけでなく、周囲のものにも関心を持つような観察が必要だと思った。

（16男性）**「障害？を持った男の子」「未完成な親子愛」**

〈根拠〉赤ちゃん、親両方とも息苦しそうではあるが、子どもが母親のことを信頼していると思われるような行動をとっているため、今後は良くなってくると思うから。

「些細な手の動きや表情を見落としている」

私は子どもの表情や仕草などに目を向けてビデオを見ていたが、子どものほんのちょっとした手の動きや表情を見落としていた。だから（感想文を）紹介された学生たちとの違いは、ほんのちょっとしたところに目が向いたかどうかだと思う。だから、対人援助職に就くことを目標としている人間として、私はそのような小さなこと、クライアントの（何気ない）ちょっとした仕草や態度を（見過ごすことなく、その意味を考え）捉えることができるようになりたい。

（20 男性）**「母親の気を引きたい子」「子の自主性を尊重しない親と、それに言いなりの子」**

〈根拠〉母親が子どもと室内で一緒の時はほとんど子どもが遊んでいることに関わっていた。具体的にはボールを転がしたり、車のおもちゃを示してみたりと、子どもの行動に親が干渉しすぎているように感じた。そして、子どもの方も親が示した道具で毎回遊んでいた。これは日常的に親が子どもに干渉し、選択肢を無意識のうちに奪っていたのではないかと考えられる。

「人の顔色を気にする自分の見方への気づき」

人は生まれてから成長し、今に至る過程で、全く同じ育ち方をすることはありえない。何らかの出来事や印象深いことなどが人の性格及び価値観の形成につながっている。この成長する過程での違いが、（現在の人それぞれの）着眼点の違いとなって表れたのではないかと考えられる。

私は幼少期から人の顔色をよく気にしていたため、今回も子どもの母親に対する感情面を中心に考えたが、逆にＡ子さんのような思考はあまりしてこなかった。そのため、今回の（見方の）違いが発生した。

（25 男性）**「閉じた空間を好む子ども」「母親に気持ちをうまく表現できない子ども」**

〈根拠〉人から抱っこされると、自然に指しゃぶりを始め、泣き止む。→あやされる必要はあまりになく、自分で泣き止む方法を知っている。他人に干渉されると泣き出し、母親に抱っこされると泣き止む。

「子どもの特徴を押さえていれば感じる違和感を感じ取れていない」

A子さんの感想文を読み、先生の解説を聞いて、最も大きな違いが生まれた理由として、子どもの特徴を知らなかったことが大きいと思う。例えば、母親が急に外に出た時、すぐに追うことをしないのを見た時、私はそれが不自然であるとは思わなかった。なぜなら、私は、母親がいなくても数分ほどなら大丈夫だと思っていたからだ。静かでおとなしく、子どもらしくないところから、私はしっかりしている子どもだと思い、母親がいなくても気丈に振る舞えると思っていたからだ。その後、泣き出した時も母親がいないことに気付いたから泣いたのではなく、自分が遊ぶことに飽きたから、その不満を訴えるために泣いたのだと思った。

しかし、A子さんの感想文を読み、先生の解説を聞くと、あの子どもは実に子どもらしくないのだとされている。その上で映像を見てみると、確かにあの子どもは大人びているというよりも、子どもらしくないと評価した方が正しいと思える。自分は子どもが1歳であるということを無意識のうちに（いつの間にか）忘れていたように思える。子どもの特徴を押さえていれば抱く違和感を感じていなかった。そのことが私に欠けているものだと思う。

(27) 女性**「大人びた子」「焦る母親」**

〈根拠〉母親は子どもに積極的に関わりたいが、その気持ちが空回っているように見えた。子どもが滑り台で遊んでいるにも関わらず、「ブーブーは？」「あんよは？」と次々に話しかけている。子どもはその語りかけに対して困惑しているようだった。また、子どもが抱っこを要求すると、母親は抱きかかえるが、すぐに遊びに誘う。子どもはただ抱っこして欲しかったのだが、母親はすぐに遊びに誘うことに対し、拗ねているのではないかと考えた。母親はなんとか子どもと関わろうとしているが、素っ気ない子どもの様子に困り果て、ただしきりに子どもの頭をなでることしかできなくなっている。母親の子どもの成長に対する焦りや不安が子どもに伝わり、お互いにぎくしゃくしてしまい、段々と気持ちがすれ違ってしまったのではないかと推測する。

「誰を中心に見るかによって劇的に変わる印象」

前回のビデオを見たときは、子どもを中心に親子の関係を見ていたが、今回親を中心に見てみると劇的にビデオの印象が変わった。

母親は子どもに対し、非常に不安を抱えている。母親には理想の子ども像があり、それを追い求めるあまりに、不安や焦りを感じている。またそれらの感情を隠そうとするかのように、周りに対して見栄を張っている。

ストレンジャーが入室した途端、頭を撫でる回数が増えたのは、自分はこれだけ子どもを可愛がっているんだ。しきりに子どもに挨拶させようとするのは、自分のしつけが上手くできていることを周りに見せるため。押し車で遊ばせるのも、自分の子どもでは歩くことができるのだと周りに訴えるため。母親は常に周りからの評価を気にしている。周りを気にするため、自分の子ども（の気持ち）に目が向かず、気持ちのすれ違いを生んでいる。

私は子どもの行動に目を向けてしまいがちであることがわかった。子どもだけではなく、母親にも重点を置いてみると、今まで感じることのできなかった様子や、自分が不思議だと感じた子どもの行動の理由、真意がわかるようになった。親と子の間で流れる空気というものを感じ取らなければ上記のような見方はできなかった。

（37 女性）**「コミュニケーション力がない」「･･･」**

〈根拠〉目を合わせようとしない、母親が抱っこすると泣き止む。

「細かく見て子どもの特徴に気づくことができていない」

私が今までの 2 回の動画で気づかなかった点は、母親が右から寄ると、子どもは左に避けた。母親が左に寄ると、子どもは右に避けるようにしていたところと、母親がボールを転がすと、子どもはそのボールを振り払うところだった。その場面は、子どもが母親に意地を張っているように見えて、無視するような素っ気ない態度であったので、A 子さんの感想文と照らし合わせて見て、なるほど、と思った。まだ私はそこまで細かく見て子どもの特徴に気づくことができていなかった。だから、次の動画から、少しずつ観察力を身につけて、特徴を捉えられるようになりたいなと思う。

（42 女性）**「好奇心が低い子ども」「希薄だが確かな親子関係」**

〈根拠〉母親の声に反応せず、笑顔もなかったが、ST を嫌がり泣き、母親が戻ると泣きやんで、落ち着いていたため。母親が抱っこをしている時、子どもの右手が母親のことを押し、嫌がっているように見えたから。母親と目が合っていない。

「話を聞く前と後では全く見え方が変化するのは面白い」

観察によって目がいくところが違うのはとても面白いなと感じた。私は物事を否定的に観察しているなと感じた。今回のビデオを見ていて、あまり肯定的なイメージは出てこなかった。他の人の意見を聞いていて、なるほどと思うところもたくさんあったけれど、そのようには見えないなと思う意見も多かった。しかし、様々な意見があることを理解し、認めていくことが大切なのではないかと思う。話を聞く前と後では全く見え方が変化するのは面白いと思った。また、その時の自分自身の気持ちや感情によっても見方が左右されるなと思った。自分の気持ちがイライラしている時は否定的な面がよく目につき、楽しい感情の時は、肯定的な面によく目がいくなと思った。

（43 女性）**「激しすぎる人見知りの子ども」「母親を信頼しているが笑顔を見せない子」**

〈根拠〉母親にも笑顔を見せない。話しかけても聞いていないのか、あまり応えない。母親がいなくなった時、ちょっと怖かった？ST の顔を見て泣き出した。→母親じゃないと確信した？（多分それまでは母親だと思っていたかも？）抱っこを嫌がらない。母親が来たら落ち着く。母親の顔をあまり見ない。違う方向を向いている。

「言われてみて初めて気づく違和感」

最初にこのビデオを見た時、普通の子どもじゃないの？赤ちゃんらしい赤ちゃんだけどなー、などと思いましたが、2 回目に、あれ、ちょっと違うかもと思いました。さらに、今日、A 子さんの感想文を読んでみると、ああ、そういうことか！と納得させられた部分がたくさんありました。おそらく A 子さんは細かい部分まで観察することができ、人の気持ちをうまく読み取ることが

できる人なのだろうなと思いました。A子さんの文章を読み、そして先生の解説付きでもう一度ビデオを見ると、違和感がたくさんあることに気づきました。

着眼点を変えるだけで、こんなにも新たに気づく部分が増えるんだと思ったのと同時に、自分はビデオの細かい所まで、ちゃんと見ることができていなかったのだとも思いました。

「子どもの中途半端な甘え方」、「違和感のある親の行動」、ここから読み取れることはたくさんあったはずなのに、それさえにも気づくことができていませんでした。この子どもはただの人見知りの子ではなかったんだということにも気づきました。もっと子どもと母親の行動を一つひとつ注意深く見る必要があったと思います。

(45女性)**「ハイハイで動き、少しの音に敏感だが、母とボールが好きな普通の子」「新米ママは心配性」**

〈根拠〉いろいろと話しかける。ちゃんと答える。何度も、何度も頭をなでる。ボールを前に出したり、抱っこしてたり、過保護ぎみ。新米ママ？第1子？抱っこのときに目を合わせない。なんで泣いているの？といった呼びかけがない。泣いたらすぐに来る。

「人見知りだった自分を通して見ていたことに気づく」

この男児はおそらく親のこうしてほしいという願望を読み取っているのだと思う。そして、親の気持ちに応えようとしているのではないかと、今回（3回目）見て改めてそう思った。(親のご機嫌取りということになりそうだけれど)

A子さんの感想と比較した時に、(子どもと母親との間に）不思議な心の壁があるという感想については、私も同じであるが、この子は母親に意地を張っているわけでも、自分が恥ずかしくなって母親の方を見ていないというわけでもないと思った。

自分は7歳の時に生まれた従姉妹（いとこ）と深く交流を持っていたため、比べる対象が「いとこ」と「この子」ということになっていることに気付いた。さらに、自分は小さいころとても人見知りをしていたので、人見知りとい

う一言でストレンジャーに対する子どもの態度を表し、深く観察できていないことに気付いた。

(50 女性)**「他者との関わりや自己表現が少し苦手な子」「温度差はあるが互いに大好き」**

〈根拠〉移動のために母親を呼ぶ。母親は積極的に子どもに話しかけるが、子どもはそれにあまり反応しない。母親が撫でても子どもは笑わない。抱っこは嫌がらない。ST にも抱っこを求めると、泣き止まず、母親が見えるまで泣き続けた。あまり目を合わせたがらない。母親は過干渉。

「事前の情報から抱く先入観にとらわれている自分」

A 子さんの感想文を読んで、子どもが母親のいる状況といない状況での態度の違いや違和感を「子どもが意地を張っている」「恥ずかしくてきまりが悪い」と考えていることに驚き、面白い発想だと思った。私は子どもの特性であると思っていたため、「子どもがわざとやっている」ものであるという考え方が出てこなかった。子どもが 1 歳であることや事前のデータ（情報）から、「子どもの気持ち」というものに焦点を当てていなかったのだと考える。データから先入観を持ってしまうという自分の観察の特徴に気づくことができた。

母親の撫で方については A 子さんと意見が一致した。

(56 女性)**「母親がいなくなると泣く」「常に子どもに意識を向けている」**

〈根拠〉子どもが泣かないように子どもが遊んでいる側にずっといたり、泣くと泣き止むまでそばにいて、常に子どもを意識している様子が見える。

「何回か見るうちに子どもの心境を感じるようになる」

私は子どもが普通にボールで遊んでいるだけだと思っていました。ただ、母親と離れた途端に、子どもは泣き始めたとき、母親に構って欲しくて泣いたんだという点は同じであると思いました。けれど、A 子さんの感想や先生の解説を聞きながら、もう一度映像を見ると、こういう点もあったのかと気づきました。

例えば、子どもがボールで遊ぶシーンでは、私は最初見た時、ただボール遊

びに熱中しているだけなのかと思いましたが、そうではなく、よく観察すると、母親が（自分の）左にいる時、子どもは右にボールを投げ、母親が右にいる時は、子どもは左にボールを投げ、母親の方を一切見ないといった点に気づきました。

またストレンジャーが部屋に入ってきた時の子どもの表情や仕草から指しゃぶりは不安や緊張の表れだとの解説を受けて、なるほどと思いました。母親が部屋を出て行くシーンでは、それまで子どもの口が開いていたのに、ドアが閉じて母親の姿が見えなくなった瞬間から口をぎゅっと閉じるシーンが見受けられました。こうした細かな動作や一瞬の表情から子どもの考えていることや思いを読み取れるので、本当に集中してみるべきだと感じました。何回か視聴するうちに、この子どもは今こういう心境なんだなとか感じながら見ることができたので良かったです。

(59 女性)**「母親の区別が出来る子ども」「子には母が必要」**

〈根拠〉母親は常に子どもを見ているが、子どもは視線を向けるところがばらばら。母親の目を見ることが少なく、好きなように行動している。室内で知らない人と二人になると、不安になって大泣きして母親を探し求める。母親の姿を見つけて抱きかかえ、あやしてもらうと安心し、指しゃぶりをし始めて泣き止む。

「表面しか見ていない自分への気づき」

私には表面の薄っぺらな部分しか見えない特徴がある。子どもが母親に関心をほとんど示さず、あまり反応しないが、ストレンジャーが入ってくれば、母親を求める姿に、ただ自分の世界に入りがちな人見知りする子どもだと捉えてしまった。しかし、実際には、子どもは１歳なのだから、見知らぬ人が入ってきたら、怖がるのは当然だし、子どもも自分の母親なのだから無関心ではないと改めて考えさせられた。

私は深いところまで見て考察する力があまり備わっていないように思える。

5．考察

（1）親子関係を肯定的に評価する根拠は何か

今回供覧した事例は、母子間になんとも言い難いアンビヴァレントな情動が立ち上がり、そのため、子どもは母親との間で「甘えたくても甘えられない」心理状態にある典型例として示したものである。

しかし、この母子関係に対して、60 名中 25 例（41.7%）もの学生が肯定的評価をしていた。その多さは筆者の予想をはるかに超えるものであった。肯定的評価をした根拠をみると、判で押したように、ほとんどの学生が「母子分離で子どもは泣き出したので、ST はなだめたが、それでも子どもは泣き止まず、母親が戻って抱っこすると落ち着いた」ことを取り上げている。

この事例の特徴として、母子二人で遊んでいる時、子どもは母親の誘いには乗らず、背を向け、拗ねたような態度を取っている。最初の母子分離では、ST が相手をすることでしばらくは泣かず、ST に気遣うような態度さえ見せていた。2 回目の母子分離で一人ぼっちになってもすぐには泣き出さず、数十秒あたりの様子をうかがい、いよいよ我慢が限界に来て、思い余って泣き出している。

筆者がこの事例をこのように捉えることができるのは、母子間に立ち上がるアンビヴァレントな情動の動きを感じ取っているからである。もしも、それができなければ、母子双方の行動の意味（意図）は読み取ることは難しい、というよりも不可能である。

なぜ、これほど多くの学生たちが母子間に立ち上がる情動の動きを感じ取ることができなかったのか。今回の研究対象は、対人援助職を目指して勉学に励む学生である。非常に困惑している母親と子ども、双方の気持ちを感じ取ることができなくて、このような母子間に関係の問題（関係障碍）を抱えている事例に対して、それにふさわしい対人援助などできるはずはない。そのことを考えると、今回の結果は何を示しているか、人材養成の教育を考える上で、ぜひとも検討すべき課題だと思われる。

（2）男性に比して、より多くの女性が母子関係を肯定的に評価したのはなぜか

さらに驚かされたのは、当初予想していたよりも、男性よりも女性の方が肯定的に評価している学生が多かったことである。

もちろん学生はいまだ子育て経験をもっていない。しかし、それでも身近に子どもと接したり、親子に触れ合ったりすることは、女性の方が男性よりも多いだろうし、子どもの気持ちも肌で感じやすいのではないかと筆者は予想していた。

その意味では今回の結果はかなり深刻なものとして受け止める必要があるのではないか。今や男性が育児に従事することを当然とみなされてきた時代とはいえ、出産から乳児期の育児では圧倒的に女性の役割が大きいからである。

今日の少子化時代では、少ない子どもを大切に育て、良い教育を受けさせ、希望の大学に合格できることを目指して、熱心に子育てに従事している親は少なくない。そのような育児環境が今日の大学生たちの育ちにどのような影を落としているのであろうか。

今籍を置いている大学で、筆者は学生相談にも従事しているが、そこで出会う学生のほとんどが、大学生になってもいまだに親との拘束的な関係に引きずられ、そのしがらみから抜け出せず、悶々としながら、様々な症状や苦しみを訴えてくる。ひどく親の顔色をうかがいながら生活している姿をそこに発見することが多い。それは彼らの幼少期での「甘え」体験をめぐる問題をいまだに引きずっている姿を示していると言ってよい。

（3）学生は「感性教育」でどのような気づきを体験したか

では今回の「感性教育」で学生たちはどのような気づきを体験しているのであろうか。その内容を検証することによって、今後の教育に対する一つの方向性を見出すことができるのではないかと思われる。

学生たちの気づきを検討すると、いくつかの観点から整理することができる。

a）自分が先入観にとらわれていることに気づく

具体的には、肯定的評価群で、（33 女性）「何かしら感じていた“壁”という違和感の意味に気づかされた」、（46 女性）「1 歳の子どもの知識がなかっ

た」、(48 女性)「『普通の親子』だという思い込み」、(57 女性)「一度思い込むとそこから容易に抜け出せない」。

ついで、否定的/両価的評価群では、(3 男性)「病的な子どもという先入観から子どもらしい一面を見過ごす」、(4 男性)「ただ母親を求める赤ちゃんの映像だと決めつけていた」(50 女性)「事前の情報から抱く先入観にとらわれている自分」などである。

「この子は何かの障碍を持っている」という事前に与えられた情報にとらわれる。あるいはこの母子関係の特徴として「一人ぼっちになって泣いていた子どもが母親に抱かれて泣き止む」という一面的な行動的特徴をとらえて、そこに子どもに母親に対する信頼感を見て取ったり、普通の親子だと即断したりしていることがわかる。

母子交流のごく一面を捉えて即断する。あるいは、なんらかの事前の情報、親子関係はこういうものだという先入観などにとらわれてしまう。目の前の母子交流の実際の場面をアクチュアルに捉え、そこで感じるものを大切にするという観察態度がいかに難しいかがここに示されている。

b) 指摘されて初めて違和感に気づく

具体的には、肯定的評価群で、(15 男性)「幅広い視点から考えることの大切さへの気づき」、(26 女性)「母親が子どもの頭をさかんに撫でる違和感を考える」などである。

ついで、否定的/両価的評価群では、(16 男性)「些細な手の動きや表情を見落としている」、(25 男性)「子どもの特徴を押さえていれば感じる違和感を感じ取れていない」などである。

先の先入観にとらわれる学生たちと関連の深い反応ではあるが、なんとなく気になるところ(違和感)は感じつつも、それ以上深く考えることを回避し、常識的で無難なところでまとめてしまおうとする態度が、これらの学生の気づきからうかがうことができる。だから、たとえ違和感を感じ取っていてもそれから先に進むことができない。筆者からみれば、ここで踏み止まってともに考えていくことにこそ、臨床での患者理解の深まりにつながっていくと思われるのである。

ただ、筆者にとって大きな収穫となったのは、最初は違和感さえ感じ取れなかった学生たちの多くが、見本の感想文を読むことによって、自分が違和感を感じ取れなかったことに対する素直な気づきを見せたことである。つまり、彼らも違和感そのものを意識化することは困難であっても、前意識ないし無意識水準ではそれを感じていること、そしてそれを意識化することが比較的容易にできることを示しているともいうことができるからである。

今回の大人数での感性教育ではもっとも重要な要素である対話を実施することが困難であったことを考慮すると、このような結果はある意味当然といってよい。

c）多様なものの見方の大切さに気づく

具体的には、肯定的評価群で、(11 男性)「自分の観察で足りなかったのは何か」。

ついで、否定的/両価的評価群では、(8 男性)「周囲のものにも関心を持つ観察の必要性」、(16 男性)「些細な手の動きや表情を見落としている」、(27 女性)「誰を中心に見るかによって劇的に変わる印象」、(37 女性)「細かく見て子どもの特徴に気づくことができていない」、(42 女性)「話を聞く前と後では全く見え方が変化するのは面白い」、(43 女性)「言われてみて初めて気づく違和感」、(56 女性)「何回か見るうちに子どもの心境を感じるようになる」、(59 女性)「表面しか見ていない自分への気づき」などである。

多くの学生たちが、いかに自分が一面的なものの見方にとらわれていたか、に気づいている。この結果はある意味好ましいことで、実際の生身の人間観察は多様な見方を必要とすることから、「感性教育」の目的の一つは達成されていると考えることはできる。

d）見るたびに新たな発見があることに気づく

具体的には、肯定的評価群で、(21 男性)「新たな発見の喜び」、(30 女性)「見るたびに新しい発見がある」、(35 女性)「見るたびに新しい発見がある」、(49 女性)「何回も見ることによって気づくことができた喜び」などである。しかし、否定的/両価的評価群では、これに類似した気づきを述べた学生はいなかった。

先に「多様なものの見方の大切さに気づく」学生たちの気づきを取り上げたが、そのことによって「新たな発見の喜び」を体験したと述べた学生たちの多くが肯定的評価群であった。このことは一体何を意味しているのであろうか。

筆者は今回の「感性教育」で「新たな発見の喜び」を述べている学生たちの気づきを素直に喜べないものを感じている。なぜなら、今回供覧した母子関係そのものには非常に深刻な母子間の屈折した「甘え」にまつわる情動の動きを感じ取る必要があるが、そのことができていないからである。

「新たな発見の喜び」は一見前向きで優等生的な表現であるが、この種の気づきだけをえて、感性教育の成果だとして安易に喜んではいられない。

なぜ多くの学生がアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることが難しかったのか、その要因を検討するためには、学生自身の幼少期体験そのものを振り返る必要がある。この点からすれば、今回の大人数を対象とした「感性教育」の試みでは、対象学生の感性自体に深く食い込むことは困難であると考えざるをえない。

e）自分の幼少期体験と重ねて見ている自分に気づく

具体的には、肯定的評価群で、(13 男性)「自分にも同じような経験がある」、(19 男性)「母親の存在の大切さ」などである。

ついで、否定的/両価的評価群では、(20 男性)「人の顔色を気にする自分の見方への気づき」、(45 女性)「人見知りだった自分を通して見ていたことに気づく」などである。

これまで取り上げた学生たちと異なり、母子関係の観察から感じ取るという営みは、自らの幼少期体験を思い出すことにつながることをこれらの学生は実感をもって語っている。

じつは、「感性教育」で実施している、具体的な母子交流の観察という課題は、単に中立的な立場からの行動観察とはまったく異なった作業であることを、これらの学生は体感している。母子交流を観察すると、目の前の母子間に立ち上がっているこころの動きを、観察者（学生）自らのこころにも同質のものが立ち上がるものである。それを自らの内面をモニターすることによってはじめてどのようなこころの動きかを感じ取ることができる。そのことをこれらの学

生の感想からうかがい知ることができる。

「感性教育」でもっとも重視しているのがこのような観察態度である。そのためには自らの内面のこころの動きに対して目を向けながら、目の前の対象に誠実に対峙することがもとめられる。これこそ対人援助を生業とする人間科学での実践家養成のためのもっとも大切な課題の一つだといってよい。

本来、他者理解においては、自分の類似体験が想起され、それを通して理解するという一面がとても強い。その意味からすれば、「自分の幼少期体験と重ねて見ている自分に気づく」ことはとても望ましく、「感性教育」の目的の一つといえるものである。

しかし、残念なことに、自分の体験自体がある意味教条的なものとなり、それが一つの先入観となってしまい、それ以上は理解が深まっていないという一面もうかがわれる。このことは今後の検討に価する課題である。

（4）ものの見方の多様性と関心・欲望相関としての世界の知覚体験

今回の試みで、多くの学生たちが「多様なものの見方の大切さに気づく」ことができたことは一つの教育的成果ということはできようが、それで喜んでばかりはいられない。それはある意味当然のことであって、「感性教育」でなくても可能な気づきである。

ここでもっとも重要なことは、「多様なものの見方があるからなんでもあり」ではないという点である。自分のものの見方を規定しているものは何かに気づくことの重要性を「感性教育」ではもっとも重視しているからである。というのも、ある対象の意味を捉える際に、それは関与的観察者の関心や欲望のあり方と深く相関するからである。

とりわけ筆者が「感性教育」で目的とするのは、対人援助職になろうとする学生たちが人間観察をする際に、いかに自分の関心や欲望、さらには幼少期体験が深く関連しているかを実感するとともに、他者理解が自己理解と切っても切れない深い関連性をもつことを理解できるようになることである。

したがって、そこまで踏み込んだ教育を目指すためには、これまで筆者が試みてきた少人数の大学院生を対象とした対話を重視した「感性教育」がぜひと

も必要であることを、今回の研究から再確認することができたように思う。

（5）感性をいかに磨くかーいま対人援助職の人材養成教育に求められているもの

筆者が「感性教育」を試みるようになった最大の動機は、大学教育の現場に対する強い危機感からである（小林、2017a）。

わが国の教育改革の動きを見ても、この数年「アクティブ・ラーニング」が盛んに取りざたされ、文部科学省の学習指導要領関係の文章では「主体的・対話的で深い学び」と称されている（藤井、2017）。

このような教育の動向をみると、大学で一般的に実施されている従来型の専門知識の教授を中心とした教育のあり方も問われなければならない。

とくに筆者が関与する対人援助職において、望ましい臨床家を養成するための教育方法を考えたとき、そのことはより切実なものとして迫ってくる。

今回の研究結果からわかるように、人間観察力の養成には「感性」つまりは「感じ取ること」が強く求められる。自己理解が他者理解と深く関連しているからである。そのことを考えたとき、専門知識の教授を中心になされた結果、どのような人材が育成されるのか、真剣に考えて見る必要がある。筆者の危機感はそこから発している。

おわりにーある学生の感想からー

「感性教育」は何を目指しているのであろうか。またそれは学生にとってどのような体験となっているのであろうか。そのことをよく物語っているある学生（43 女性）の体験談がある。以下、再掲しよう。

（43 女性）「言われてみて初めて気づく違和感」

最初にこのビデオを見た時、普通の子どもじゃないの？赤ちゃんらしい赤ちゃんだけどなー、などと思いましたが、2 回目に、あれ、ちょっと違うかもと思いました。さらに、今日、A 子さんの感想文を読んでみると、ああ、そういうことか！と納得させられた部分がたくさんありました。おそらくA 子さ

んは細かい部分まで観察することができ、人の気持ちをうまく読み取ることができる人なのだろうなと思いました。A子さんの文章を読み、そして先生の解説付きでもう一度ビデオを見ると、違和感がたくさんあることに気づきました。

着眼点を変えるだけで、こんなにも新たに気づく部分が増えるんだと思ったのと同時に、自分はビデオの細かい所まで、ちゃんと見ることができていなかったのだとも思いました。

「子どもの中途半端な甘え方」、「違和感のある親の行動」、ここから読み取れることはたくさんあったはずなのに、それさえにも気づくことができていませんでした。この子どもはただの人見知りの子ではなかったんだということにも気づきました。もっと子どもと母親の行動を一つひとつ注意深く見る必要があったと思います。

この学生の体験談には「感性教育」で筆者が目指しているものの多くが語られている。本来、教育は学生の感性を揺さぶるものでなければ、単なる知識の習得に終わる。

感性を磨くことによって、筆者は自らの本業の一つである臨床という営みの面白さを体感するようになった。学生にもそのような臨床家を目指して欲しい。筆者の最大の願いである。

最後に、関与観察の重要性を指摘した精神科医サリヴァンが『精神医学的面接[2]』（Sullivan，1954）のなかで述べていることを以下に紹介しよう。そこには、臨床研究者に求められる関与観察がいかに厳しい内実をはらんだものかをうかがい知ることができる。肝に銘じたいものである。

「精神医学という分野は対人関係の学である」

「精神医学のデータは関与的観察をとおしてのみ獲得できるものである」

「精神科医の主要観察用具はその『自己』である。その人格である。個人と

---

[2] ここでサリヴァンが述べている「精神医学的面接」はけっして精神医学の専売特許を指摘しているのではない。あらゆる対人援助職の専門家に向けて述べたものである。

しての彼である。また、科学的検討に適合してデータとなりうるものは過程および過程の変化である。これらが生起するところは被検者の個人の中ではない。観察者の内部でもない。観察者と被検者とのあいだに創造される場（状況、situation）においてである。」

「純粋に客観的データというものは精神医学にはない。さりとて主観的データそのままで堂々と通用するものもない。素材を科学的に扱うためにはいろいろな力動態勢や過程や傾向性をベクトル的に加算して力積をつくらなければならない。力積の作成操作を推論（インフェレンス）という。推論があちこちに飛び、思いがけない形を見せるところに精神医学研究の困難もあり、実用に耐える精神医学的面接の難しさもある。」（pp. 19－20）（傍点は小林）

最後に本研究に対して率直な感想を述べてくれた本学学生諸君に謝意を表したい。

文献

藤井千春（2017）．子どもが「深い学び」を遂げるために―「この子」の意味世界の生成・発展を読む．西南学院講座　in Tokyo「アクティヴ・ラーニングの目指すもの―『深い学び』と『感性を磨く』―（臨床と哲学のあいだ Part 4）」配布資料、pp. 12－40．ステーションカンファレンス東京サピアホール、2017. 11. 3．

小林隆児（2015）．あまのじゃくと精神療法―「甘え」理論と関係の病理―．弘文堂．

小林隆児（2016）．発達障碍の精神療法―あまのじゃくと関係発達臨床―．創元社．

小林隆児（2017a）．臨床力を高めるための感性教育（研究叢書 No. 42）．西南学院大学学術研究所．非売品．

小林隆児（2017b）．子ども目線からみた子育てを語ることはなぜ難しいか―感性教育で気づかされること―．そだちの科学，28，91－96．

小林隆児（2017c）．臨床家の感性を磨く―関係をみるということ―．誠信書房．

小林隆児（2018a）．なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか．西南学院大学人間科学論集，13(2)；215－243.

小林隆児（2018b）．常識 common　sense を疑い、共通感覚 sensus　communis を呼び醒ます―「感性教育」の目指すもの―．西南学院大学付属臨床心理センター紀要，創刊号，2－7.

小林隆児（2018c）．発達障碍の精神療法の難しさはどこにあるか．精神療法，44(2)；235－236.

小林隆児・西研（編）（2015）．人間科学におけるエヴィデンスとは何か―現象学と実践をつなぐ―．新曜社.

Sullivan H. S.(1954). Psychiatric Interview. Norton. 中井久夫ら訳（1986）．精神医学的面接．みすず書房.

西南学院大学人間科学部社会福祉学科